

初期ラカンについての考察

——フロイト・ヘーゲル・シュルレアリスム⁽¹⁾——

金子 亮 二

0. はじめに

本稿では、ジャック・ラカン（1901～1981）がシュルレアリスムとも縁が深い、哲学史家フェルディナン・アルキエ（1906～1985）に送った1929年の10月16日の日付の一通の書簡をもとに、最初期のラカンが、ヘーゲル、フロイト、そしてシュルレアリスムの影響をどのように受け入れていたかを考察することを目的とする。ラカンとシュルレアリスム、その双方においてフロイト主義、ヘーゲル主義が取り沙汰されるが、ラカンにおいては、その二つの思想をぶつける形でこの時代の彼の関心事であった「パラノイア」を理論化することになる。そのパラノイアの理論化を巡りシュルレアリスムとの理論的接合点を見出すことで、シュルレアリスムが、フロイトとヘーゲルの「あいだ」で思考を促す存在であったことを確認したい。

1. アルキエとラカン

ラカンは1929年の10月16日の日付でフェルディナン・アルキエ宛ての手紙を送っているが、そこで語られていることは、その後のラカンの理論的な歩みをすでに刻み込んでいるように思われる。そのため、初期のラカンの理論的な関心と、その後の展開の連続性を描き出すために、そこで語られる内容を見てみたい。

アルキエは、1906年生まれであり、ラカンより五つ年少だが、彼らの間に交流があったということは、あまり知られていない事実である。おそらく、それは、双方がお互いを参照することがなかったためであろう。少なくとも、ラカンについて言えば、『エクリ』を開いてみても、アルキエの名前を見つけることはできないし、セミネールですら、彼がアルキエの名前に言及することはない⁽²⁾。そのため、この手紙の読解に入る前に、多少彼らの関係がどのようなものであったか確認しよう。

彼らの関係は、ギー・ル・ゴーフエがラカンのアルキエ宛の手紙を発見したことによって裏付けられている⁽³⁾。ゴーフエが発見した手紙は、全部で六通、それぞれ、1928年5月8日、同年6

月4、1929年10月16日、1938年8月15日、1946年1月10日、1948年12月17日の日付である⁽⁴⁾。雑誌などにも公刊はされておらず、1985年に設立された「精神分析ラカン学派」« L'École lacanienne de psychanalyse »のサイト上で閲覧ができる。

ラカンが彼に送った、残されている手紙の中で一番古い、1928年5月8日の日付のものを見ると、「私たちはあなたが私に手紙を書いてくれると約束したのではありませんでしたか？」« N'avions-nous pas convenu que vous me donneriez de vos nouvelles ?⁽⁵⁾ »と書いているが、ラカンが年上ということもあるのか、どうやら彼の方がアルキエの手紙を待つような立場だったことがわかる。そのため、おそらく彼らの関係は、最初ラカンが興味を持って近づいていったことによって始まったということがうかがえる。

ラカンからアルキエに宛てられたこれらの手紙は、近況報告や、食事の誘いなど、多かれ少なかれ、いわゆる手紙というものが持つ機能、日常的なコミュニケーションの手段としての役割を果たしているだろう。けれども、これからみる1929年の手紙は、その中でもとりわけ長いものであり、他の手紙がそういった日常的なものであるのに反して、かなり倫理的な含みを持っているものである。それは、当時アルキエがある女性との関係において、自殺未遂を行うまでの危機に陥っていたという事実と何らか関係しているように思われる。

アルキエは当時どのような状況にあったのか。アルキエの死後、彼が若い時期に書き記していた手帳が出版された⁽⁶⁾。アルキエは、1927年、彼が21歳の頃から手帳を書いていたようだが、その中には、家族の系譜、自身の交友関係といったものから、哲学的な考察まで、彼の青年期の書き物が取められている。また、少なからず、アルキエの哲学者としてのイメージを変えたこの本⁽⁷⁾の中には、彼が若い頃に経験した、ラカンが手紙を送る一ヶ月前の出来事が記されている。

その出来事は、1929年の9月にアルキエの身に起こるのだが、アルキエはその頃の日記を残してはるわけではない。同年の10月になって、アルキエ自身が「私は一月以上も前からこのノートを中断していた。その感情や印象を、それらを全く感じなかった時に記すことができたに過ぎない」« J'ai interrompu ce cahier depuis plus d'un mois. On ne peut vraiment noter ses sentiments, ses impressions que lorsqu'on ne les éprouve pas tout à fait⁽⁸⁾ »と述べているように、アルキエにとってその出来事は、手帳を中断させるほどのものであった。それは、1929年、彼が父親の葬儀のため、故郷である南仏のカルカソンヌに滞在した夜、そこからそれほど遠くはない、カネ＝タン＝ルシアンに戻った時に起きた出来事のような。彼がカネに戻ってきてから、ある日外出した時に、当時親しくしていた「アメリー」という女性とすれ違い、振り返ると、彼女が「ルノワール夫人」という女性の家に入るところを見かけた。その時、アルキエは驚くほどの怒りを感じたと記しており、自殺したいと思うほどの強い衝動を感じた⁽⁹⁾。

この出来事に対して、アルキエ自身はなぜ怒りを感じたか説明を与えてはいない。アルキエによれば、ルノワール夫人は2年前に娘を亡くしたようで、アメリーは、夫人を気遣って彼女の家を訪問していた。アルキエは父を亡くした「喪」の状態にあったわけだが、ジャン・アルーシュ

によれば、こういったアメリーの行為は、その「喪」に対する慰めをアルキエにではなく、ルノワール夫人に与えるということを意味し、アルキエの怒りはそういった嫉妬に近いものに由来するのだと解釈している⁽¹⁰⁾。

そして、アルキエは、この事件の後から、パリでの生活に嫌気がさしたこともあり、パリ以外の場所での職を申し出る。手紙の中からわかることは、ラカンはいったアルキエの事情をどうやら、ポール・ベニシュー⁽¹¹⁾から聞き出したようで、アルキエに対して手紙を出したと推測される。

そして、先ほど述べたように、ラカンはそういったアルキエの事情を考慮して、アルキエの決定に対して、彼は「あなたのために何ができるでしょうか？ できうる範囲では行政上どのような結果がありうるのでしょうか？」*« que peut-on faire pour vous ? Quel résultat est administrativement dans les limites du possible⁽¹²⁾ »*と手紙の中で書いており、そういったアルキエの身の振り方に対して、早まったものではないのかと遠回しに伝えているように思われる。

前置きが長くなってしまったが、以下に手紙の一部を見てみよう。そこで、ラカンは「私たち」という人称を用い、その「私たち」にアルキエを含めながら、ある「もの」*« quelque chose⁽¹³⁾ »*が「私たち」の中へと住み着いていることを彼に気づかせようとする意図を読み取ることができるだろう。

2. アルキエ宛て手紙の読解

アルキエ、あなたはそれを感じますか？ 私たちの奥底に潜み、私たちとともに、しかし私たちに逆らい、成長し成熟し、私たちに寄生しているけれども、なんども私たちを死に打ち勝たせるものを。

ほぼ私たちに逆らって、と私は言いましたが、この「もの」は成熟することに成功する必要があります。なぜなら、私たちがその「もの」の到来の時期を早めることや、形を導くということに裁量があるわけではないからなのです。少なくとも損害無くしては。

私たちの努力、日常の仕事は確かにこの「才能」を養ってはいるのです — 少なくともそう信じたいものです。けれども、それはこの努力の内容や対象によってというよりは、この努力が私たちの人格を活気づけ、興奮させ、鍛えさえる限りにおいてなのです。これが私たちに先天的な「もの」を目覚めさせるに過ぎないということ、そして、この「もの」はどんな荒れくるいにも — 無気力にさえも、おそらく共鳴するようなものであるということは明らかです。

しかし、私たちの中にあり、私たちを支配するこの「もの」、これは、不純に変えてしまうようなものと結びついた限りでは、せり出すこと、そして勝利を収めることはできません。そういった、不純に変えてしまうものとはまさに私たち自身なのです。憎むべき私たち、私たちの特徴、私たちの個人の出来事、私たちの利益なのです。

禁欲主義のただ一つのあり方がそういったことに対処しなくてはならないと思います。それはつまり、対象に対する私たちの欲望を、粉々にすること、願望が私たちの中に生み出す、混乱それ自体に

よって私たちの願望を失敗させることによってです。私たちの失敗ほど、私たちの悪魔によって深く望まれているものは何もないということを私は言いたいのです。その失敗の水準で判断をしましょう。

Le sentez-vous, Alquié ? Quelque chose gît au fond de nous, qui, avec nous, mais presque malgré nous, croît et mûrit, qui vit de nous mais nous fait triompher maintes fois de la mort.

Presque malgré nous, ai-je dit, cela doit parvenir à être mûr. C'est qu'aussi bien nous ne sommes pas libres d'en hâter la venue, d'en orienter la forme – du moins sans dommages.

Nos efforts, notre travail quotidien certes nourrissent ce « génie » – du moins on veut le croire. Mais c'est moins par le contenu et l'objet de ces efforts, qu'en tant qu'ils tonifient, exaltent et exercent toute notre personne. On sent bien que tout cela ne fait qu'éveiller quelque chose d'inné en nous qui aussi bien résonnerait peut-être à n'importe quel déchaînement – ou même à l'inertie.

Pourtant cela qui est en nous et qui nous possède, cela ne peut saillir et triompher tant que lui est lié ce qui le rend impur ; ce n'est rien moins que nous-même – le nous-même haïssable, notre particularité, nos accidents individuels, notre profit.

Un seule mode d'ascétisme me semble devoir parer à cela : broyer nos désirs contre leur objet, faire échouer notre ambition par le désordre même qu'elle engendre en nous. Je veux dire que rien n'est plus profondément voulu par notre démon, que certains de nos échecs. Jugeons-le à leur taux.⁽¹⁴⁾

暗示的であり省略的な文章ではあるが、手紙の中で使用されている述語に気を配りながら、まずは一段落ずつ内容を確認していこう。

第一段落だが、人間主体の中に存在し、「逆ら」いつつも、「死に打ち勝たせる」ような「もの」
« quelque chose », そういったものについてラカンはこちらでアルキエに向けて語っている。利をもたらすとともに、害にもなるこの「もの」がこの手紙の主題となるだろう。「もの」は、「私たちの奥底」
« fond de nous » に宿っているのであり、何か非人称的な次元を思わせる。ここでの、「私たち」という人称の選択は、そういった「もの」の存在に普遍性を持たせるための一つの戦略であるだろう。

第二段落では、「もの」が「私たち」に逆らいながら、「成熟」しなければならないということが語られる。その点において、「私たち」に大きな裁量は与えられておらず、「私たち」に忍耐を強いるような状況に置く。そのため、「私たち」にとって、この「もの」は大きな「抵抗」として現れる。その意味において、「もの」は、精神に対置される「物質性」を示すものでもあるだろう。また、「もの」は「形」へと導かれなければならないということが記述されており、不定形の「もの」が「形」を取る必要があると、記述されているように読めるため、単に隠喩的な表現を駆使した、観念的な内容が問題となっているわけではなく、「私たち」に逆らう物質性を有している「もの」が、ここで描き出されているように思われる。

第三段落からは、少し話が展開していき、「もの」に対しての主体の活動との関係が語られる。この「もの」がここでは「才能」
« génie » とも言い換えられており、「私たち」の「努力」
« efforts » や、「仕事」
« travail » が、この「才能」を「養って」いるということを若干悲観的には

あるが確認している。ここでの「努力」や「仕事」は、「人格」を活気づけるというような言葉遣いから、例えば、研究といった知的な側面だけではなく、もう少し広く人間主体のあり方を問題とするようなものであると思われる。

そして、「私たち」の「努力」の「内容」« contenu »というよりは、この「努力」を行うこと、それ自体が「私たち」を規定し、「才能」を養っているということが語られている。ここでいう「努力」は、「才能」をコントロールできるわけではなく、むしろ「努力」は、盲目的にこの「才能」に突き動かされる、そういった主体のあり方を示している。第二段落では、「もの」に対しての裁量がないということを確認したが、ここでも「もの」に対しての「受動性」が問題となっているように思われる。

そして、これらの「努力」は、「私たち」の中に何らかの「先天的な」« inné »「もの」を生み出し、それは「荒れ狂う」こともあれば、「無気力」に結びつくこともあると書かれている。「荒れ狂い」と「無気力」。言い換えるならば、何らか「躁」と「鬱」を思わせるようなことが書かれている。ここでは詳しく検討していく余裕はないが、実際に、ラカンがアルキエ宛に送った手紙には、詩が同封されていて、その詩の宛先は「メランコリー」であった。つまりは、メランコリーを受取人として見立てているわけであるが、暗に、アルキエにそういった症状を伝える身振りであるように思われる⁽¹⁵⁾。ひとまずこの件りを「もの」の制御することの困難さが強調されている箇所として理解しておこう。

続いて、第四段落では「もの」は「純粹」ではないもの、つまり「私たち」自身と結びついてしまうことが避けられるべきであると語られている。そうなれば、それは「せりだす」« saillir »こと、「打ち勝つ」« triompher »ことができない。最初の段落では、「もの」が人間の「奥底」に存在するとラカンが言うように、これらの« saillir »や、「« triompher »とともに、合わせて考察すれば、この「もの」は、垂直的な空間のメタファーを通して、描かれていると言うことがわかるだろう。

最初の段落で言われていたことは、勝つのは「死」« mort »に対してであった。そのため、「私たち自身」« nous-même »と結びついてしまうということは、「死」をすら意味するということが語られているように思われる。それでは、この「私たち」とは、ここで何を意味するのだろうか？ラカンが第一段落で確認していたことは、この「もの」はそもそも「私たち」の中に存在しているものであるということだ。そして、ここでさらに「私たち」と「もの」が結びつく、とラカンが記述するのであれば、それとは別の事態が語られていると考えるべきだろう。「もの」とは、私たちが確認してきたように、何か人間主体の中に存在する非人称的なものであるように思われる。それに対して、「私たち」を代表するために使われている言葉は、「憎むべき私たち」« le nous-même haïssable », 「私たちの特徴」« notre particularité », 「私たちの個人の出来事」« nos accidents individuels », 「私たちの利益」« notre profit » というものであり、ある種の個人の事情に結びついたものだ。つまり、もし「もの」が非人称的なものを示すとするならば、ここでの「私たち」と

は、こういってよければ、エゴイズムを代表しているように思われる。つまりは、ここで「私たち」が示しているものとは、「自我」と呼べるような個性を示すものとして考えても差し支えはないだろう。少なくとも、「もの」は、それ自身、結びつくべきではないものに結びつく、あるいは混同されやすいものとして描かれているということは確認することができる。

そして、第五段落。ここでは、「禁欲主義」« ascétisme » というものについて書かれており、それが「私たち」が取り扱いに難儀するこの「もの」に対処するために必要だということが記されている。ここでは、「欲望」という言葉が使われている。この「欲望」についてまず見てみよう。今まで語られていたことは、「自我」を代表とするような「私たち」から「もの」を切り離さなければならぬということであった。であるため、「禁欲主義」は、こういった切り離しを促すためのものであることがわかるだろう。そして、そのためには、「欲望」の失敗が必要であると述べられている。それも、「欲望」の最中における失敗である。そのことを考えると、「禁欲主義」は、「欲望」を生み出し、その混乱の中で「もの」と「自我」との結びつきを切り離し失敗させる、そういったことを意味していると思われる。つまりは、「自我」を失墜させるようなものとして、この「禁欲主義」は考えられているだろう⁽¹⁶⁾。

この「欲望」は「自我」に由来するような、ある種卑小な欲望なのかといった、欲望の帰属先は確かに曖昧ではある。けれども、第四段落では「私たち」という呼称は、ラカンがアルキエとの間の共同性を表現するものとして使用していると同時に、「もの」の非人称性と対比されている限りでの「自我」の側面を示すものでもあった。そのことを考慮すると、「私たち」の「欲望」とは、やはり「自我」に由来するような欲望であると考えべきではないだろうか。つまりは、この「禁欲主義」は、自我に由来するもので、自我を失敗させる、そういったあり方を示しているように思われる。

ともかくも、初めから四つ目の段落までで問題となっているのは、人間の内に存する「死に打ち勝たせる」が、同じく「失敗」させもするような両義的⁽¹⁷⁾な対象をどのように成熟させるかということであり、そして最後の段落では、それに対処するための「禁欲主義」が呼び出される。この「禁欲主義」についてももう少しコメントを付け加えるならば、その通常とは反対の考えがここで示されているように思われる。欲望を禁じるのではなく、むしろ、欲望の存在を肯定している。最終的に欲望の目論見を退ける、簡単にいえば欲望に振り回されない、という点では同じだが、そこに至るための欲望のあり方が大きく異なっている。また、ここで重要なことは、欲望を失敗させることを能動的に求めるということであろう。

以上、ラカンの手紙で語られる、内容を見てきたが、何か非人称的な「もの」が「自我」と結びついてしまうことに対する警告とも読み取れる内容が書かれていることを、ここで確認した。そして、これらのことをラカンはアルキエに向かって述べていたのであり、アルキエのなかにそういった、「もの」と「自我」との結びつきが認められ、それに対処するべきであることをラカン

は彼に向けてメッセージを送っているように思われる。つまりは、恋愛において生きられる経験において、ラカンはこのような助言をアルキエに向けているだろう。そして、そこでは「自我」というものを廃棄する運動が、自らの欲望によって導かれる「混乱」によってなされるべきであるということが確認されている。

この考え方を、後年のラカンの理論に照らし合わせれば、どのように捉えることができるだろうか。欲望とその失敗において新たに出会われる主体性という側面を考えれば、こういった手紙で語られる「失敗」は、ある種ラカンの「現実界」との出会いを意味するものでもあるだろう。このような考察を、すでに精神分析を始める前からラカンが行なっていたということは興味深い。そのため、ラカンはどのようにこの考えを着想したのかを跡づけることが必要だが、この手紙の前にラカンが残している資料は数少ないため、そういった作業は困難である。

よって、多少強引ではあるが、のちのラカンの理論においてそれがどのような変遷をたどっているか、これを検討することで、この手紙の理論的射程を後付けることを試みたい。実際に、この手紙は、こういった「現実界」との出会いという読解すら呼び寄せるようなものであり、その後のラカンの精神病や精神分析の理論における、一つの「プロトコル」のようなものとして機能しているように思われる。

具体的に言えば、手紙において「禁欲主義」と名指されるものが、奇妙にもラカンがこの手紙が書かれた三年後に提出した『人格との関係からみたパラノイア精神病』における「エメ」の症例において示されるものと類似しているように思われるからだ。その著作を見ると、この手紙で問題となっていることは、やはりこの年代においてラカンが考察を巡らしていた「パラノイア」であるということが確認されるだろう。そのため、次にラカンの博士論文で語られる内容へと移っていきこう。

2. 「エメ」について

ラカンは、1932年に医学博士論文『人格との関係からみたパラノイア精神病』を出版する。ラカンは、この著作の中で、「エメ」と名付けられる、ある女性の精神病患者の病歴を詳細に記述し、また彼女が書いた小説や手紙などの彼女個人のエクリチュールをも収集し、その一部を論文の中に掲載している。彼女の本名はマルグリット・アンジューといい、精神分析家ディディエ・アンジュー（1923～1999）の母であることは比較的よく知られた事実であるように思われる。

彼女は、パラノイアの主題とされる迫害の妄想を持っており、彼女の初めての妊娠とその死産において、その迫害の妄想とそれに伴う敵意が結晶化する⁽¹⁸⁾。そして、彼女の妄想は次第に敵意の対象を遷移させていきながら、最終的には、自分に不利な「スキャンダル」を巻き起こす、彼女とは面識の無いユゲット・デュフロという、ある女優を切りつけ殺人未遂で逮捕されることに

なる。けれども、逮捕され拘留された後、20日でそういった妄想が消えてしまうのである⁽¹⁹⁾。

ところでラカンは、彼女の小説や手紙を論文中に掲載し、精神病とエクリチュールとの関係を指摘しているが、それが精神病を示すというような診断的な視点からだけではなく、精神病と創造性との本質的な関連を思わせるような見解を示していることは指摘しておくべきだろう。このラカンの論文が、精神医学的な判断に止まらないエクリチュールへの考察を含んでいることや、妄想的な確信を持ち、自身を迫害する敵対者に攻撃を仕掛けた、いささかアンチ・ヒロイックな特徴を持ったエメという人物の形象があったためか、この博士論文は精神医学界というよりも、ルネ・クルヴェルやサルヴァドール・ダリを始めとするシュルレアリストから関心を持って読まれた⁽²⁰⁾。

妄想が消えるということは、当然ながら精神病が治癒するということを示している。こういったエメの病態を、ラカンは「自罰パラノイア」の名前で呼んだ。ラカンは、この病名で以って、患者の妄想とその背景には、ある自罰の欲求が存在していると述べているのだ。「自罰パラノイア」を説明する中で、ラカンはフロイトの理論を応用し、リビドーの発達における超自我の形成に対応する時期において、リビドーの自己愛的な固着が起きているという分析を行い、この新しい診断名を下したのであった。それは、最終的に自罰の欲求を満たすことが、満足を与えるという逆説的な症状である。つまり、「彼女が「実現」したことは、彼女が自分自身を打ちのめしたということであり、また矛盾したことに、その時だけ彼女は熱情的な憎悪の満足の特徴付ける感情的な安らぎ（涙）と妄想の突然の消退を体験したのである」
« Ce qu'elle « réalise » encore, c'est qu'elle s'est frappée elle-même, et paradoxalement c'est alors seulement qu'elle éprouve le soulagement affectif (pleurs) et la chute brusque du délire, qui caractérisent la satisfaction de la hantise passionnelle⁽²¹⁾ »。

ラカンの分析によれば、エメは、ある女優を攻撃したわけだが、それは彼女を迫害してくるような対象でありながら、彼女自身が自らなりたいと望む羨望の対象でもあった。その二つの対象を想像的に同一化することで、エメにとってこの二つが結びついた対象を反復することになる⁽²²⁾。そして、この自らの理想像でもある対象を攻撃することによって、エメは自分の欲望が満足することを知るのである。

だから、エメは情痴犯がその憎悪と愛情の唯一の対象を打つように、彼女の外在化された理想を、彼女の犠牲者において打ったのである。けれどもエメに傷つけられた対象は純粋な象徴としての価値しか持たず、そして、彼女は態度のいかなる軽減も体験しなかった。

しかし、法の前で彼女を有罪とする同じ打撃によって、エメは自らを打ち、そして彼女がそのことを理解した時、彼女は欲望が成就される満足を体験したのである。つまり妄想は不必要となり、消えていったのである。

Aimée frappe donc en sa victime son idéal extériorité, comme la *passionnelle* frappe l'objet unique de sa haine et de son amour. Mais l'objet qu'atteint Aimée n'a qu'une valeur de pur symbole, et elle n'éprouve de son geste aucun soulagement.

Cependant, par le même coup qui la rend coupable devant la loi, Aimée s'est frappée par elle-même, et, quand elle le comprend, elle éprouve alors la satisfaction du désir accompli : le délire, devenu inutile, s'évanouit.⁽²³⁾

このように、エメの妄想は、消えていくことになる。それはこの患者が、自分の理想像を攻撃し、そのことでまさに罪を得ることによって、ある種の欲望の成就を体験したからである。ラカンが指摘しているが、エメはその対象を攻撃をするだけでは、妄想が鎮静することはなかった。法のもとで有罪とされる、そういった事実の方が、エメにとっては重要だった。つまり、自罰の欲望とは、自分に対して法の裁きをくだすということが問題となる。松本卓也が適切に指摘しているように、「エメは、彼女が有罪であることを宣告する〈法〉の到来によって、精神病を治癒させる」のだ⁽²⁴⁾。

ここで、語られる「欲望」の成就も逆説的な欲望であることを指摘しておくべきだろう。つまり、自分の欲望を消し去るような欲望がここでは問題となっている。欲望が、妄想それ自体を消し去ってしまったのであり、つまりは欲望がそれ自身の基盤となっていた、妄想を取り去ってしまったということである。

こういった点で、エメの症例とラカンのアルキエ宛の手紙は本質的に結びつくものだろう。もう一度整理をするならば、ラカンがアルキエの手紙で語ったことは、自分の欲望が引き起こす混乱の中での失敗が、「自我」を廃棄するための方法なのであり、欲望を退ける一つの「禁欲主義」であるということだった。つまりは、そこでも欲望が、自身の根拠を掘り崩すような欲望が問題となっていた。

確かに、アルキエの手紙の中で記されていた「欲望」は、特に狂気を示すようなものとして語られていたわけではなかった。その反対に、エメの妄想＝欲望は当然ながらパラノイアックな狂気に基づいたものである。けれども、エメにおいては、迫害の主題と、誇大の主題が結びついており、それらを攻撃したことが、二つの主題の切り離しに結びついたということを考えれば、アルキエ宛の手紙での「欲望」の「失敗」は、同じように、「もの」と「自我」との間の切り離しを行うものであり、若干の相違があるものの、治癒へと目指す中での欲望の動きは相似形を保っている。また、エメにおいてのこれらの結びつき自体が、手紙で言われていたような、「もの」と「自我」との間の結びつきと同じものであるということも考えられるだろう。

だから、私たちは次のように言うことができるだろう。つまり、ラカンがアルキエに向かって語った「禁欲主義」とは狂気に対する治療論である、と。狂気を狂気に由来する欲望によって治療すること、これが問題となっている。

3. パラノイアの治療と精神分析

実際に、ラカンの治療論と考えられるこの「禁欲主義」に近いものは、彼が精神分析家として活動し始めて以降の分析状況の理論化において、引き継がれていることを確認することができる。ラカンは1930年代半ばから自身の精神分析の活動を始めたわけだが⁽²⁵⁾、例えば、『エクリ』所収の「精神分析における攻撃性」という論文の中に以下のような精神分析の実践のあり方として記述されている。

正面から攻撃するのは違って、分析の産婆術は回り道を通り、それは結局主体の中にある方向付けられたパラノイアを誘い込むことになる。それこそが、分析行為の諸局面の一つであり、メラニー・クラインが内なる悪い対象と名付けているものの投影の操作をすることだ。それは、まさしくパラノイアのメカニズムだが、しかしここでは十分に組織化され、ある意味で濾過され適当に封じ込められているパラノイアのメカニズムである。

Loin de l'attaquer de front, la maïeutique analytique adopte un détour qui revient en somme à induire dans le sujet une paranoïa dirigée. C'est bien en effet l'un des aspects de l'action analytique que d'opérer la projection de ce que Mélanie Klein appelle les mauvais objets internes, mécanisme paranoïaque certes, mais ici bien systématisé, filtré en quelque sorte et étanché à mesure.⁽²⁶⁾

この論文は、1948年のブリュッセルでのラカンの講演を基にしているが、メラニー・クラインの名前も出てきており、精神分析における具体的な実践が投影のメカニズムを介して説明されている。ここで重要なことは、被分析者の中に、ある種パラノイアを一時的に引き起こすことが語られているということだ。それは、「方向付けられたパラノイア」« une paranoïa dirigée »と呼ばれている。それは、手紙で語られていたような、欲望を引き起こすことにより、最終的にその欲望を克服するといったあり方と類似するものであるだろう。ここで異なるのは、「産婆術」とも言われている通り、医師との間で投影を起こさせ、精神分析医がそれを統御するという弁証法的な関係が問題となっている。ここでは、ラカンは精神分析医との間での投影を考えているわけだが、ある種そこで、パラノイアがひきおこす「混乱」を再現させるという点では共通しているのであり、つまり、アルキエとの手紙において語られる「禁欲主義」で目指されるあり方が、後のラカンの精神病に対しての理論化に対して、引き続き関心事となっているということを確認することができる。

ここまで、ラカンの最初期の1929年の手紙を起点として、主に40年代のラカンの精神分析における理論化の側面までを確認してきた。それを踏まえて確認できることは、手紙の第三段落を注釈する際に少し指摘したが、この手紙はラカンの当時の狂気に対しての厳密な理解に基づいて書かれているということである⁽²⁷⁾。「精神分析における攻撃性」で語られている分析実践は、分

析者と被分析者の間で、アルキエ宛の手紙の言葉を借りれば、最終的に患者の中の「もの」と「自我」の結びつきが切り離され治療へと向かうのである。また、これらの事実から、ラカンがアルキエ宛の手紙で語っていたことは、パラノイアを問題としていたということがわかるだろう。

そのため、手紙の内容はパラノイアと、こういった転移を巡っての問題として理解することもできるだろう。こういったことと関連する事実として、ラカンの博士論文の中で、すでに精神分析の治療実践に対して言及していたことを取り上げることができる。例えば、博士論文中の次の引用を見てみよう。

実際、今日の技術が精神分析家に対して課す非常に困難な問題は次のようなものである。すなわち、できるだけ引き延ばされたある転移によって患者の自己愛的動向を修正することが必要だ。

Le problème en effet très épineux que la technique actuelle pose au psychanalyste est le suivant : il est de toute nécessité de corriger les tendances narcissiques du sujet par un transfert aussi prolongé que possible.⁽²⁸⁾

ラカンはまだ、この論文を書いた1932年においては精神分析家であったわけではないが、まず、彼は精神病における精神分析と、当時の治療の実践の状況がまだあまり進んでいないということを確認している⁽²⁹⁾。そして、こういった精神病の治療において考慮されるべきものが他ならぬ精神分析であるということを描する⁽³⁰⁾。この意味でラカンは、このパラノイアについての論文を書いた時期が、大きく自身の実践を精神分析へと向けていく転換点となるだろう。ともかくも、ラカンは論文の中で、精神病患者において転移を用いた精神分析の実践の可能性を示唆している。そして、この「引き延ばされた転移」を起すことによって、自己愛的なりビドーの修正を図ること、これを精神分析の治療実践で行うべきことと考えているだろう。

4. フロイト・ヘーゲル・シュルレアリスム

ラカンの博士論文を読むことで確認したように、ラカンの手紙の内容は、ある種パラノイアの状況を反映し、その中での治療論を構成するものとして読むことができるだろう。ここでやはり、答えなければならないのは、この手紙をラカンはどのような思想的影響下で書いたかということだ。のちのラカンの展開をたどることによって、私たちは、特に博士論文において、フロイトのリビドー理論に基づいたエメの「自罰パラノイア」を、そして、「精神分析における攻撃性」で、そのパラノイアにおける弁証法的な分析のあり方を確認してきた。それゆえ、この手紙は、これらの理論を下敷きにしているという意味で、こういったフロイト的な理論とヘーゲル由来の哲学とを内在させているように思われる。

手紙の「禁欲主義」では、第四段落で確認したように、垂直的なメタファーにおいて「もの」

が捉えられており、「自我」を突き破るような「せりあがる」« saillir » 運動が記述されている。その意味では、フロイトの第二局所論におけるエスと自我との関係を読み取ることもできる⁽³¹⁾。エスは人間の「奥底」にあり自我はそれを統御する……。けれども、手紙で語られることは、単純にエスが、自我を打ち負かし、欲望を解放することが問題となっているわけではないだろう。それは、ラカンがそのプロセスをわざわざ「禁欲主義」と呼んでいることから理解される。また、自我に由来するもので、自我を失墜させるということが問題になっているのであり、そういった意味で、手紙の図式を単純な第二局所論に還元することができるものではない。

そして、「もの」に対処するためにおいて、最終的に自我が廃棄されるべきだという考えは、ある種ヘーゲルの哲学からの影響とも読めなくはない。とはいえ、やはり重要な違いは、手紙の第二段落で言われている通り、「もの」はその物質性とともに語られており、ヘーゲルの哲学における、精神の中のみで考えられるような、自己の直接性からの脱却が問題となっているのでもない。これらの手紙に、フロイトやヘーゲルの思想の影響が垣間見れることは間違いのないのだが、そのどちらにも還元することは叶いそうにもない。フロイトの思想からも、ヘーゲルのそれからも微妙に逃れてしまうようなラカンの手紙の記述を、シュルレアリスムとの接合点として見いだすことは可能だろうか。

フロイトは当然ながら、この年代において、パラノイアについての理論的関心と、ヘーゲルの読解は、シュルレアリスムにとっては重要なものとして捉えられていたことは多くの研究者が指摘している⁽³²⁾。パラノイアは次に見るように、ダリにおいてシュルレアリスムのオートマティスムの「受動性」に取って代わるものとして打ち出されていた。また、アルキエの手紙では、欲望が引き起こす「混乱」が重要であるということを確認したが、そういった「混乱」の重要性の指摘は博士論文の中では行われていないということは示唆的であるだろう。というのも、こういったパラノイアの治療論は、なによりもシュルレアリスムとの理論的接合点において、形成されていたもののように思われるからである。

この時期において、ラカンとシュルレアリスムに共通して存在したものはなんだったのだろうか。例えば、ダリとラカンとの理論的な参照関係は有名であるが、『ミノトール』誌の論文で、ダリはラカンの博士論文を、自分の論を補強してくれる科学的な後ろ盾として引用していた。それとは異なるが、例えば、『革命に奉仕するシュルレアリスム』誌に掲載された、「腐った驢馬」の中で、ダリは次のように述べている。

混乱を体系化するという激しくパラノイア的な意思によってならば、モラル的傾向のある活動さえ、引き起こせるかもしれない。

Une activité à tendance morale pourrait être provoquée par la volonté violemment paranoïaque de systématiser la confusion.⁽³³⁾

このように、ダリは論文の冒頭で確認しているが、自分の中の観念を徹底的に客観性を持って証明しようとするパラノイアの力に期待をかけている。そして、ダリのパラノイア理解においても、混乱を「体系化」し、統御していくことが重要であると理解されるだろう。ラカンもパラノイアにおいて自我を廃棄することを問題としていたわけだが、それはまさに、欲望の「混乱」の中で行われるべきことであった。また、そこでは、欲望を譲歩するのではなく、混乱を徹底的に進めることが目指されるのであり、言い換えるならば、まさに、混乱を「体系化」することであるだろう。ダリのパラノイア解釈との接合点もそこに見出される。それゆえ、混乱を体系化し、「自我」を廃棄することで、「もの」を優先させる、こういった運動をフロイトとヘーゲルの思想を結び合わせる形でラカンがパラノイアを理論化していると考えられることができるだろう。

5. 結語に代えて

ラカンの手紙を読むことによって、精神分析を始める前に、すでに、「現実界」との出会いにおいて主体性が新たに構築されるという考えが読みとれることを確認したが、そこでは、フロイト、ヘーゲル、シュルレアリスムの三つの項がラカンにおいて重要なファクターとなっていた。

最後に、手紙の中で語られる「もの」に対して、のちのラカンの理論の視点から、幾分をコメントをつける必要があるだろう。この「もの」は、後年『精神分析の倫理』のセミナーで厳密に理論化される際に再び登場することになる。そこでラカンは、フロイトの『科学心理学草稿』における、幼児の知覚においては、その幼児を養う「隣人」は、知覚可能な部分と知覚から逃れてしまう部分に別れる、という議論を取り上げ、後者に「もの」の次元を割り当てている。こういった「もの」の次元は、やはり主体に逆らって存在するのであり、「表象不可能性」として考察されることになるだろう。また、そういった表象不可能性を検討する上で、ラカンが立ち寄ったのは、16世紀のアナモルフォーズであり、シュルレアリスムであるということは指摘すべきだろう⁽³⁴⁾。「もの」をめぐる問題圏の中には、このフロイトとヘーゲル、シュルレアリスムの三項が関わっていると思われる。

このように、のちの理論にたやすく結びついていくラカンの「もの」。この「もの」は私たちがここで見てきたように、アルキエにラカンが語ったように、分析の状況で出会われ、それを終わりまで導くような主体性の到来を導くものとして、ラカンの起源の理論において読み取ることが重要であるだろう。

注

- (1) 本論文は、2017年度提出の修士論文『30-50年代の精神病理論を中心とするラカン理論における創造性の問題について——シュルレアリスムと主体』の一部を加筆修正したものである。
- (2) 例えば、こちらのインデックスを参照。Henry Kruzten, *Jacques Lacan Séminaire 1952-1980 Index référentiel*, Economica, 3e édition, coll. « Psychanalyse », Paris, 2015.
- (3) Jean Allouch, *Une femme sans au-delà : L'ingérence divine III, Ferdinand Alquié, Jacques Lacan, Friedrich Nietzsche*, Paris, Epel, 2014, pp. 82-83.
- (4) アルキエへの手紙は、サイト上で閲覧できるものでは6通存在し、日付は述べた通りだが、ルディネスコはラカンについての伝記の中でこれとは違う情報を与えている。彼女もアルキエ宛の手紙が6通存在したことを報告しているが、異なる点は、彼女はその最後の手紙を1956年に書かれたものとしているということだ。そして、彼女によればその56年の手紙の中では、デカルトについての議論がされているという。サイト上で閲覧できるものの中にそういった議論がみられる手紙は存在しないため、彼女は全く別の手紙の存在を示唆していることになる。また、彼女が6通の手紙が存在すると述べることは、サイト上の一つの手紙が抜け落ちてしまうことになる。ともかくも、いくつかの齟齬が生じているわけだが、ひとまずここでは私たちが閲覧できるものを参照したい (Elisabeth Roudinesco, *Jacques Lacan : Esquisse d'une vie, histoire d'un système de pensée*, Fayard, Paris, 1993, p. 666. エリザベト・ルディネスコ『ジャック・ラカン伝』藤野邦夫訳, 河出書房新社, 2001年, 530頁)。
- (5) Lettre de Lacan à Ferdinand Alquié mardi le 8 mai 1928, (inédite), <http://ecole-lacanianne.net/wp-content/uploads/2016/04/1928-05-08.pdf>. (2017年12月22日最終閲覧日)
- (6) Ferdinand Alquié, *Cahiers de jeunesse, présenté par Paule Plouvier, L'Age d'homme*, Lausanne, 2004.
- (7) というのも、そのノートの中にはアルキエが当時、娼館に足繁く通う放埒な生活をしていたというような告白が記されているためである (Jean Allouch, *Une Femme...*, *op. cit.*, p. 43)。
- (8) Alquié F., *Cahiers...*, *op. cit.*, p. 137.
- (9) *Ibid.*
- (10) Jean Allouch, *Une Femme...*, *op. cit.*, p. 83.
- (11) 『作家の聖別』で知られるポール・ベニシューであり、アルキエのノートを読むとベニシューと親交があったことを読み取ることができる。
- (12) Lettre de Lacan à Ferdinand Alquié mercredi le 16 octobre 1929, (inédite), <http://ecole-lacanianne.net/wp-content/uploads/2016/04/1929-10-16.pdf>. p. 4. (2017年12月17日最終閲覧日)
- (13) ラカンは、このアルキエの手紙に同封して自身の作となる詩を送っている。そこでも「choses」をラカンは登場させている。そして、手紙の中で語られる「もの」« quelque chose »と同様に、主体の中に胚胎するものとして表現されているため、複数形と単数という大きな違いは存在するも、詩で言われる「もの」と手紙の中の« quelque chose »に意味的な関連を認め、ここでは「もの」と訳したい。
- (14) Lettre de Lacan à Ferdinand Alquié mercredi le 16 octobre 1929, (inédite), <http://ecole-lacanianne.net/wp-content/uploads/2016/04/1929-10-16.pdf>. pp. 4-5. (2017年12月17日最終閲覧日)
- (15) ラカンの詩は、このアルキエ宛の手紙に同封されていたわけだが、ラカンが存命の間に公開された

機会が二度あり、1度目は、リーズ・ドゥアルム Lise Deharme が刊行していた、*La Phare de Neuilly* 誌の1933年、3-4合併号に掲載されている。もう一つの機会は、1977年発行の *Magazine Littéraire* 誌である。指摘しておくべきことは、それぞれの発表の機会において、詩のテキストは若干の変更が加えられているということだ。ヴィルギユルの位置など、変更点はいくつか存在するが、大きな違いとしては、アルキエ宛の手紙に同封された詩は、「*Melancholiae Tibi Bellae.*」という言葉が宛先として記されていたが、*La Phare de Neuilly* 誌に掲載された時には、その言葉が、「H.P., août 1929, Jacques Lacan」に置き換えられていることだろう。この「*Melancholiae Tibi Bellae.*」はラテン語で、「美しいメランコリー、あなたに」と訳すことができるため、この詩の宛先自身が、「メランコリー」というものになる。これをある種の擬人化として捉えることができるだろう。アルーシュも確認しているが、これは詩の状況を、読む人が多くなるにつれての具体的な状況を消していこうとするラカンの身振りであるとしている。そのため、詩はなおさら、手紙の宛先であり、詩の宛先でもあるアルキエの状況を指し示す、強い具体的な状況を示すものであるだろう (Jean Allouch, *Une Femme...*, *op. cit.*, p. 110-114)。

(16) この点は、ジャン・アルーシュも強調していることである。彼は、このラカンの「禁欲主義」は、様々にニュアンスを変化させながら、ラカンの後の理論の中にも見いだすことができると述べている。それは、主に次の三点であり、1) 自我のない主体としての分析家、2) 行為の中では存在しない、そういった限りにおいての行為の主体、3) デカルト的コギトの分割である (Jean Allouch, *Une Femme...*, *op. cit.*, p. 42)。私たちの観点からすれば、特に3つ目のデカルト的なコギトの解体という側面をこの手紙の「禁欲主義」が示しているという指摘は重要だろう。

(17) ジャン・アルーシュは、手紙の内に出てくる「quelque chose」を「ファルマコン」と名指している (Jean Allouch, *Une Femme...*, *op. cit.*, p. 35)。

(18) Jacques Lacan, *De la psychose paranoïaque dans ses rapports avec la personnalité suivi de Premiers écrits sur la paranoïa*, Éditions du Seuil, Paris, 1975, pp. 159-160.

(19) *Ibid.*, p. 173.

(20) この著作は、ラカンが、例えば、『エクリ』所収の「心的因果性について」の論文の中で思い起こしているように、極めて冷遇されたのであった。また、ラカンは、フロイトにもこの医学博士論文を謹呈したようだが、ルディネスコによれば、フロイトはそれを開いてすらいない。それに比べて、今あげたクルヴェルや、ダリ、あるいはジョー・ブスケといった面々がこの博士論文に反応しているのである (Roudinesco, *Jacques Lacan*, *op. cit.*, p. 88. ルディネスコ, 前掲書, 75頁)。

(21) Lacan J., *De la psychose paranoïaque...*, *op. cit.*, p. 250.

(22) 「私たちがそれを示したように、エメの妄想の全ては反対に、彼女が直接的な対象を無視しようとする一つの憎悪のつぎつぎの遠心的な置換として理解される。」
« Tout le délire d'Aimée, nous l'avons montré, peut au contraire se comprendre comme une transposition de plus en plus centrifuge d'une haine dont elle veut méconnaître l'objet direct. » (Lacan J., *De la psychose paranoïaque...*, *op. cit.*, p. 282.)

(23) *Ibid.*, p. 253.

(24) 松本卓也『人は皆妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』青土社, 2015年, 126頁。

(25) ラカンは La Société psychanalytique de Paris (SPP) フランス精神分析協会に1934年に加入している。

(26) Lacan J., « L'agressivité en psychanalyse » in *Écrits*, p. 109. マーガレット・イヴァーセンは、この「方向付けられたパラノイア」
« une paranoïa dirigée » というラカンの「悪い内的対象」の投影を意味する概念に、ダリのパラノイア解釈との類似を見ていることは指摘しておくべきだろう (Margret Iversen,

- Beyond pleasure : Freud, Lacan, Barthes*, The Pennsylvania State University Press, Pennsylvania, 2007, p. 41)。
- (27) アルージュも、こういった「禁欲主義」というあり方と、エメの妄想が消えたメカニズムの類縁性を指摘している (Jean Allouch, *Une Femme...*, *op. cit.*, pp. 41-42)。
- (28) Lacan J., *De la psychose paranoïaque...*, *op. cit.*, p. 279.
- (29) フロイトが、例えば、「ナルシズム入門」で、精神病においては転移による精神分析の治療が困難であることを確認していたことが想起される。当時のフランスの精神分析でもこういった、問題に手がつけられていないということをラカンのこの指摘は示唆するものだろう。「この疾患には二つの基本的な特徴がみられる。誇大妄想と、外界（他者と事物）からの関心の撤回である。第二の特徴のために、こうした患者には、精神分析によって影響をあたえることが困難になり、精神分析という方法では治療できなくなる。」(フロイト「ナルシズム入門」『エロス論集』中山元訳、ちくま文庫、1997、p. 234.)
- (30) Lacan J., *De la psychose paranoïaque...*, *op. cit.*, p. 279.
- (31) ルディネスコが指摘しているが、この時代にすでにラカンはフロイトを読みこんでいる。けれども、そこにある種の「しくじり」があることを指摘している。ラカンは、博士論文を執筆していた時代、フロイトの第二局所論の展開において理解される「無意識」の自我に対する優位性を理解しながらも、それとは反対に、「自我」の分析が重要であるということ唱えていることを、ルディネスコは指摘し、第二局所論を正確に位置付けることができなかつたと主張する。少なくとも、私たちがみてきたように、「自我」にラカンの考察は向かっているということは確認することができるだろう (Roudinesco E., *op. cit.*, p. 78. ルディネスコ, 前掲書, 67 頁)。
- (32) ヘーゲルについて言えば、アンドレ・ブルトンとポール・エリュアールは『処女懐胎』の中で、「媒介」というその思想の影響が濃厚である章を設けていることから理解されるだろう (これは、次の論文の指摘に負っている。Jacqueline Chénieux-Gendron, « Jeu de l'incipit et travail de la correction dans l'écriture automatique », in *Une pelle au vent dans les sables du rêve : les écritures automatiques*, études réunies par Michel Murat et Marie-Paule Berranger, Presses Universitaires de Lyon, Lyon, 1992, p. 129)。
- (33) Salvador Dalí « Âne pourri » (1930), *Oui : La Révolution paranoïaque-critique, l'archangélisme scientifique*, Denoël, Paris, 2004, p. 153.
- (34) ここでは、「宮廷愛」の文脈で、両者が登場する。この点については、以下の研究が詳しい。立木康介『狂気への愛、狂女への愛、狂気の中の愛——愛と享楽について精神分析が知っている二、三のことから』水声社、2016. Henri Rey-Flaud, « La Sublimation de Freud à Lacan : Le fil rouge de l'amour courtois », in *Figures de la psychanalyse*, 2002/2 n°7, ERES, pp 137-148.